

(コメント・伊藤慎一) =>産学連携に対し大変参考になる分析を示して戴き、良く解りました。

産学連携の内容が多様化する中で、海外との連携に学会としても踏み出したことに興味を持ちました。

その点について、もう少し補足して戴けると有難いです。

(小野) 色々な捉え方があるが、時間的熟成の中で連携の在り方も多様化する中で、連携をまた連携して行く過程で、よりシナジー効果もあり発展が見込まれると思われる。此れからかも知れません。

=====

D木村雅和= (発表用資料)

<http://www.j-sip.org/pdf/05kimura.pdf>

質問・コメント：北村寿宏

※上記 URL より資料をご覧いただけない場合は、以下のサイトよりご覧ください。

http://www.j-sip.org/os_kiroku.html

『地道な地域興し・人材育成と大学経営との連携』

・私自身、地域共同研究センター専任教官の経験者（産学連携を専任している感覚は無かった）

- ・ 知的クラスター創成事業が全ての始まり／知的財産本部の設置 2003 年一つの転機
- ・ 地域のために何でもやった／トップガン教育システム（地域青少年の学力と進取性向上）
- ・ 産学連携から地域イノベーション・エコシステム構築へ
- ・ 第9期運営の基本『新しい価値の創生』（原点に立ち、学会員のための学会を目指す）
- ・ 大会の活性化（参加人数の増加）、新しい支部（中部・北陸支部）の設立
- ・ 研究会（地域社会実装研究会等）の設置
- ・ 日韓比較研究会を通じた海外学会との連携
- ・ 他学会との連携（建築学会との研究会）
- ・ 財政運営改善：単年度収支の赤字 2 回）
- ・ 会員数の減少

○会長として至らなかったこと 『拡大路線が陰り年間事業のバランスが崩れ始めた』

- ・ 財政運営に大きな影響、学会活動を支えてきた人材の入替り
- ・ 新しく産学連携の役割を果たす人材が上手く取り込めなかった
- ・ 国立大共研センターからコーディネータ、URA、私立大連携従事者や企業の関係者等への主体の返還への対応が上手く行かなかった
- ・ 学会の今後に向けその存在意義、役割、ミッションを再定義しつつ、必要な機能や仕組み等を模索
- ・ 将来構想委員会を設立し、検討開始、現執行部に引き継がれている
- ・ O I 研、R A 研、地域実装研、行動経済・社会システム研、日韓比較研

(今必要と思うこと)

- ・再度の徹底した現状分析 ・類似学会との差別化
- ・学会の創設時から産学連携地域連携を取り巻く環境が大きく変化
- ・時代変化に適応しているか見直す必要あり (単発事業には人が集まるが会員として定着しない原因)
- ・これからのターゲット層に対して学会員になることのメリットを示せるか
- ・産学連携の概念が変化している中で学会名も含め、学会の在り方規模や方向性の検証が必要
- ・ただ執行部は日々の活動で精一杯なので、別途じっくり考えられる体制が必要かもしれない

(コメント・北村寿宏) =>新しい担い手を取り込めなかった、学会の担い手も変わって行く必要があった、というような反省があったが、その点について補足が有れば

(木村) 担い手が替わっていることを捉え切れていなかったし、新しい人を呼び込むことも出来なかった。しかし今の会長はしっかり考えているので、大丈夫かなと思います。

=====

E 石塚悟史 = (発表用資料)

<http://www.j-sip.org/pdf/06ishizuka.pdf>

質問・コメント：内島典子

※上記 URL より資料をご覧いただけない場合は、以下のサイトよりご覧ください。

http://www.j-sip.org/os_kiroku.html

『これからの産学連携について』 先行き不透明で予測困難な時代に

- ・時代背景 DX、GX、VUCA (Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity 変動性不確実性複雑性曖昧性) の世界で、地域エコシステム、外国人材との共生、グローバル化等の多様な課題を解決する
- ・学会員のための学会を実現する (地域連携活動の総合支援、産学連携業務の専門職化、新しい学問領域「産学連携学」の確立に向けた取り組みを強化することで会員増強したい)
- ・当たり前だが学会機能の更なる充実 (研究大会シンポ学会誌研究会等々) 支部・支部研の充実
- ・若手会員の活躍の場を創出
- ・グローバル化の強化 等々

(コメント・内島) => 今回の OS のテーマである今後の産学連携学会に向けて考えたとき、産学官連携の本質について考えていくことが重要であると考えています。産学官連携が単なる研究・開発や技術の社会実装だけを指すのではないこと、人材育成を含む教育や、まちづくりなどの地域振興をはじめとし、産学官連携が関わる社会への貢献は広範囲だとい

うことです。産学官連携は今後の社会にとってより重要な位置づけであり、だからこそ産学連携学会の意義やその価値は大きくなると考えています。様々な場面で有効とされる産学官連携によって成しえる社会を考えたとき、学会こそが産学官連携の価値を社会に伝えていくことが必要であると感じております。

石塚先生のお話は、議論のできる場・若い人の居場所が必要というご発言等、今後に期待出来るお話だったと思います。産学連携も含めた色々な変化への対応につき、地域も含めてもう少し具体的にお話し戴けるでしょうか？

(石塚) 若い人たちをどう呼び込むかですが、やはり居場所が無いと入会しても直ぐやめてしまうことになりますので、色々な情報を提供するだけでなく、発言できる機会や話せる人や場も必要だと思います。兎に角、人の繋がりを造れる場・活動できる場を、しっかり造れるようにしたいと思います。

(湯本) 有難うございました。これで歴代会長の講演部分は終わりとなります。まあ全体に余りに反省が多かったような気も致しますが、それはまた今後に生かして行けば良いことかなと思います。

ではいま丁度、時間的には折り返しですので、此処で短時間のトイレ休憩を取らせて戴いて、後半のディスカッションに繋がりたいと思います。では5分間25分まで休憩と致します。

=【トイレ休憩】=5分

※※以上、本学会高知大会・設立20周年記念オーガナイズドセッションにつきご報告でした※※

※学会誌次号は年末以降の発刊予定です。(電子出版)

※関係資料は別途学会HPにまとめて掲載しています。

http://www.j-sip.org/os_kiroku.html

当メールニュースではイベントのお知らせや公募情報等、産学連携に関する情報をお流しいたします。会員の皆様への情報の配信をご希望の方は、産学連携学会事務局(j-sangaku@j-sip.org)までご連絡ください。バックナンバー：http://www.j-sip.org/mail_news.php